

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：13401  
 研究種目：挑戦的萌芽研究  
 研究期間：2011～2014  
 課題番号：23652069  
 研究課題名(和文) ジャン・コクトーの宗教観とオカルト テキスト分析と図像解析による多角的研究  
  
 研究課題名(英文) Jean Cocteau's Religion and Occultism: A Multiple Study Based on Text and Iconographic Analyses  
  
 研究代表者  
 松田 和之 (MATSUDA, KAZUYUKI)  
  
 福井大学・教育地域科学部・教授  
  
 研究者番号：50239026  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：反カトリック的な思想の持ち主であると見なされていたジャン・コクトーは、最晩年にカトリックの礼拝堂4堂の全面的な装飾を手がけている。本研究の目的は、それらの礼拝堂の壁面に描かれた不可解な図案の数々に関するテキスト分析と図像解析を通じて、謎めいた彼の宗教観に関する理解を深めることにある。その意味を見極めるのが困難な図案も少なくなかったが、検討を重ねた結果、コクトーの教会美術作品に異端的・オカルト的な象徴性が用いられている可能性を指摘するに至った。そうした意匠は、彼がカトリックに対して抱き続けたアンビヴァレントな感情を物語るものであると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In the last decade of his life, Jean Cocteau, who was regarded as anti-Catholic, decorated four Roman Catholic chapels. The aim of this study is to better understand his ambiguous relationship to Catholicism through text and iconographic analyses of the enigmatic images painted on the walls of these chapels. It wasn't easy to understand exactly what they mean, but after careful consideration, we came to this conclusion: there is a possibility that Cocteau employed heterodox and occult symbolism in his supposedly Roman Catholic art, which demonstrates his ambivalence toward Catholicism.

研究分野：フランス文学

キーワード：コクトー 教会美術 壁画 日記 オカルト 異端 図像解析

## 1. 研究開始当初の背景

アメリカにおけるコクトー研究を牽引したフランシス・スティグミュラーの「彼が晩年の十年間に残した壁画や絵画、タペストリー作品には、どう控えめに見ても機知が、いや、それ以前に才能が、甚だしく欠如している<sup>1)</sup>」という指摘が物語るように、1950年代以降に制作されたジャン・コクトー(1889-1963)の造形作品は、総じて等閑視されがちである。だが、ある作家・芸術家が最終的にたどりついた晩年の境地を見極めずして、その文学・芸術の本質を理解することはできない。そうした認識に基づき、報告者は平成20年度から2年計画で、晩年のコクトーが残した教会美術作品に関する図像学的な調査・研究を行った(科研費:萌芽研究 20652025)。その結果、研究対象となったカトリックの教会・礼拝堂のいずれにおいても、それぞれに異端的な性格が窺える謎めいた図像の存在が確認された。

カトリック作家モーリヤックとの論争の火種となった戯曲『バッカス』(1952)や晩年の12年間(1951-1963)の日記から成る『定過去』等の著作からは、コクトーが反カトリック的な宗教観を温めていたことが窺い知れるため、彼の教会美術作品に異端的なモチーフが盛り込まれていたとしても不思議はないが、そこでは当然、慎重なカムフラージュが施されているはずであり、秘められた作者のメッセージを読み解くのは決して容易なことではない。本研究は、前回の研究の成果を踏まえるとともに、2年間の短い期間では十分に消化し切れなかった検討課題を引き継ぎ、文学的な観点と図像学的な観点の双方から晩年のコクトーの宗教観を解明するべく構想されたものである。

<引用文献>

1) Francis Steegmuller, *Cocteau*, Editions Buchet/Chastel, 1973, p.354

## 2. 研究の目的

(1)本研究は、世界的なベストセラーとなったアメリカの作家ダン・ブラウンの小説『ダ・ヴィンチ・コード』(2003)の物語中でも言及されるなど、しばしばオカルトの文脈で語られてきたコクトーの宗教観を、彼の教会美術作品とそれらが制作された時期の著作を題材に取り上げ、上述したように、図像解析とテキスト分析の両面からのアプローチを通じて解き明かそうとする試みである。コクトーは1956年から1963年にかけて、フランスとイギリスの各所で四つの礼拝堂の装飾を全面的に手がけている。サン＝ピエール礼拝堂(ヴィルフランシュ＝シュル＝メール)、サン＝ブレーズ＝デ＝サンプル礼拝堂(ミイ＝ラ＝フォレ)、ノートルダム・ド・フランス教会内の聖母礼拝堂(ロンドン、ソーホー地区)、ノートルダム＝ド＝エルサレム礼拝堂(フレジュス)がそれである。公刊を意図して書き溜められた日記集『定過去』の記述を参照しながら、各礼拝堂の壁画やステンドグラスに描かれた不可解な図案の意味と意義を明らかにすることが、本研究の第一の目的となる。それがコクトーの宗教観の解明に直結することは言うまでもない。本研究の両輪となる教会美術作品研究と文学作品研究の各々の具体的な研究目的並びに両者の連関を要約すれば、概ね次のようになる。

報告者は前回の研究を通じて、とりわけヴィルフランシュ＝シュル＝メールの海沿いに建つサン＝ピエール礼拝堂の壁画に注目し、その主人公とも言える聖ペテロやイエスより

も大きな姿で描かれた漁師像に異端的な信仰の対象とされてきたマグダラのマリアの属性が併せて付与されている可能性を指摘した。それと同様な手法、つまり特定の人物像に複数の属性（表向きの属性と真の属性）を付与する手法は、コクトーが手がけた他の礼拝堂の壁画やステンドグラスにおいても認められるかもしれない。そうした問題意識に基づいてサン＝ピエール礼拝堂を含む4礼拝堂に多様な角度から図像学的な分析を加えることが、本研究の成否の鍵を握る教会美術作品研究の第一の目的となる。

カトリックに対して批判的な考えを持っていたコクトーが晩年にカトリックの礼拝堂の装飾を手がけている事実は重い意味を持つ。しかもそれが4堂を数えるだけに、そうした取り組みが単なる偶然や気紛れの産物であったとは考えにくい。そこには何らかの狙いがあったものと考えられる。コクトーは、カトリックの宗教施設の装飾に異端的なモチーフを忍ばせることにより、自らの宗教観を暗に表明しようとしたのではないか。彼が晩年に制作した一連の教会美術作品に関して、それが明確な意図で以て戦略的になされた可能性は否定できない。先行事例の有無の確認も含めて、方法論の見地からこうした手法に考察を加えることを、本研究に係る教会美術作品研究の第二の目的とする。

『定過去』に収められた膨大な分量の日記から問題となる4礼拝堂に関する記述とキリスト教や異端思想に関する記述を抽出し、その内容を精査する。『定過去』は、公刊を念頭に置いて書かれたとはいえ、日記ゆえに断片的で文意の不明瞭な記述が多いため、慎重な

読解を心がける必要がある。コクトーの教会美術作品の図像学的な分析より得られた仮説を、それらが制作された時期に書かれた日記の記述を通して裏付けることが、本研究における文学作品研究の主要な目的となる。

(2)上記(1)の目的に沿った分析・考察の結果、コクトーの宗教観の異端的・オカルト的な性格が明らかとなる公算が大きい。本研究では、従来学問的な考察の俎上に載せることが憚られてきたオカルト的な要素にも公正な分析の光を当てることを心がけたい。文学研究においてオカルト的な要素を取り扱う際には、それを肯定するか否定するか、二者択一の判断はあえて下さず、その背景と影響について考察をめぐらせることが肝心であると考えられる。本研究においても、オカルト的な諸要素を徒に忌避するのではなく、コクトーとの関係性においてそれらを公正に捉え直す必要がある。そうした取り組みを通じてオカルト的な要素を含む文学研究の方法論を開拓することが、本研究の副次的な目的となる。

### 3. 研究の方法

#### (1)理念上の特徴

20世紀はジャンルの壁を超えて多彩な活動を繰り広げる芸術家を多数輩出した。その最たる存在がコクトーであったが、こうしたタイプの芸術家について正しい理解を得るには、単一のジャンルに限ってその作品を研究するだけでは不十分であり、複数のジャンルを同時に視野に収めた学際的な研究手法が必要不可欠となる。だが、学問領域の壁は今なお高く、それがコクトー研究の進展を妨げる要因ともなっている。本研究の方法の第一の特徴は、文学研究と教会美術研究の双方の観

点から、実証的な手法でコクトーの宗教観にアプローチする点にある。そうした着想・方法論は、文学と美術双方の領域を跨いで活動した他の作家の研究にも応用できるはずである。

我々日本人が欧米の文学・芸術を研究する際、濃淡の違いこそあれ、必ずそこに影を投げかけるキリスト教の存在は大きな壁になりがちである。だが見方を変えれば、欧米の作家・芸術家の宗教観について考察する上で、先入観に縛られずにすむという点においては、むしろキリスト教の信仰を持たない者の方が有利な場合もあると考えられる。信仰に基づく先入観によって視野が狭められることがあってはならず、カトリックの国であるフランスの研究者には見えてこない部分を、本研究において、日本人の研究者ならではの視点で捉えることができるのではないかと考える。

## (2)年度ごとの具体的な研究方法

平成 23 年度：日記集『定過去』から 4 礼拝堂や宗教に関連する記述を抽出して分析を加えるが、『定過去』には質量ともに龐大な内容が収められているため、この作業は当年度で完結することなく、平成 24 年度以降も継続して行われることになる。加えて、信仰の問題を扱ったコクトーの異色作『バッカス』に関するテキスト分析並びに同戯曲をめぐってモーリヤックとの間で闘わされた『バッカス論争』に関する資料収集及び考察を行い、別角度からコクトーの宗教観への理解を深める。

平成 24 年度：フランスとイギリスにおける教会美術作品の調査・研究を行う。前回（平成 21 年度）の現地調査は、調査対象が多かつ

たため、結果的に「広く浅く」の調査になってしまったが、今回は調査対象を 4 礼拝堂に限定し、写真撮影や実地計測等に十分な時間をかけ、各礼拝堂の内壁を飾る各種図案の詳細を把握する。

平成 25 年度：オカルト的な要素を含む文学研究の方法論の開拓にも傾注しながら、3 年間の研究成果の取りまとめを行う。

平成 26 年度：当初の予定にはなかったが、平成 25 年度には、平成 24 年度に行ったフィールドワークの際に予期せぬトラブルで訪れることができなかったフレジュスのノートルダム＝ド＝エルサレム礼拝堂を改めて訪問し、そこに収められたコクトー最晩年の教会美術作品の詳細な調査・研究をも行う予定であった。しかし、諸般の事情で渡仏する時間が持てなかったため、科学研究費助成事業補助事業期間延長を申請し、その承認を経て、平成 26 年度に同計画を遂行した。

## 4．研究成果

主として、平成 23 年度から継続して取り組んでいる日記集『定過去』の分析・読解の成果と平成 24 年度に実施したフランスとイギリスでの現地調査の結果に基づく教会美術作品（特に壁画）の図像解析の成果を基に、オカルト的な側面を持つコクトーの宗教観について考察を深めた。調査研究の対象となった 4 礼拝堂のなかでも特に報告者が興味を惹かれ、その分析に最も多くの時間を費やしたのが、ロンドンの繁華街ソーホー地区に位置するノートルダム＝ド＝フランス教会内の聖母礼拝堂である。唯一フランス国外に所在する同礼拝堂の祭壇の背後には、『ダ・ヴィンチ・

コード』の刊行以来、俄かに注目を集めるようになった異形の「磔刑図」が配されている。不穏な雰囲気を湛えたこの「磔刑図」をめぐり、上記「研究の目的」の(1)と(2)それぞれに関して、凡そ次のような研究成果を上げることができた。

(1)足元から膝上までしか描かれていない十字架上のイエスと思しき人物、その下で花開く青みを帯びた大きな薔薇、十字架に背を向ける恰好で描かれたコクトーの自画像、黒い太陽…。奇怪な図案が満載されたコクトーの「磔刑図」の中でもとりわけ謎めいているのが、画面の右端に緑の線で大きく描かれた男性像である。『定過去』に収められたコクトーの日記にこの男性像への言及が見られるが、そこでは「右側の大きな顔」という曖昧な形容が用いられており、饒舌な詩人には珍しいほど言葉数も少なく、その素性をあえて伏せようとする心理がそこに働いているような印象すら受ける。

魚形の目をしたこの謎の人物像に対して、アトリビュートという観点から図像学的な考察を加え、さらに十字架上のイエスと思しき人物の姿が下半身しか描かれていない点をも考慮した結果、その正体がイエス本人に外ならないこと、そして十字架上の人物はイエスの替え玉である可能性が強いことに思い至った。突飛な解釈と受け取られるかもしれないが、カトリックの教理の要となるイエスの磔刑とその復活による人類の贖罪という考え方をコクトーが否定的に捉えていたことは、日記中のさまざまな記述からも明らかであり、彼が意図的・戦略的に、カトリックの礼拝堂においてキリスト教の異端思想グノーシスに特有のイエス替え玉説を主張しようとした可

能性は否めない。本考察は、研究論文を通じて年度末に公表された。

(2)実は上記(1)で述べたような解釈は、ノートルダム＝ド＝フランス教会の地元イギリスの在野の歴史研究家リン・ピクネットとクライヴ・プライスが、本邦未訳である彼らの共著『テンブル騎士団の啓示 キリストの真の身元を秘かに守護してきた者たち』*The Templar Revelation - Secret Guardians of the True Identity of Christ* (1997) の中ですでに提示している。『ダ・ヴィンチ・コード』の種本のひとつとされる同書は、オカルトの範疇に分類され、アカデミックな研究対象からは予め除外される類の著作であるが、本研究においては、先入観を排してピクネットとプライスの主張と正面から向き合い、コクトーの日記の記述に照らしながら、その推論の正当性について多角的に考察をめぐらせた。その結果、確かに彼らの著作にはコクトーの日記の記述と辻褃が合わない点や牽強附会の謗りを免れない指摘も見受けられるものの、問題の「磔刑図」に加えられた解釈に関しては、大筋において同意できるものであると判断した。こうした考察を通じて、不十分ながらも、オカルト的な要素を含む文学研究の方法論を開拓するための第一歩を踏み出すことができたのではないかと考える。

本研究の調査対象となった4礼拝堂のうち、ヴィルフランシュ＝シュル＝メールのサン＝ピエール礼拝堂に関しては、上記の「研究の目的」中で述べたように、前回の研究を通じて、漁師とされる人物像にマグダラのマリアの属性が付与されている可能性が浮かび上がった。そして今回の研究においては、ロンド

ンのノートルダム・ド・フランス教会の聖母礼拝堂の壁画に描かれた「磔刑図」中の素性が知れない謎の人物像にイエスの属性が付与されている可能性を論じることができた。ある人物像に、場合によれば複数の属性を付与することでその素性を不確かなものとし、異端的なモチーフをそこに潜ませる。そうした作為の跡が4礼拝堂中の2堂において認められたことになる。残りの2堂、つまりレジユスのノートルダム＝ド＝エルサレム礼拝堂とミィ＝ラ＝フォレのサン＝ブレーズ＝デ＝サンプル礼拝堂においても同様な性格を持つ素性の曖昧な人物像の存在が確認できれば、異端的なテーマをカトリックの礼拝堂内に忍ばせるためにコクトーが戦略的に用いた手法の存在を論証することができるはずである。本研究の研究期間は平成 26 年度で終了するが、その後も、二度にわたるフランスとイギリスでの現地調査により得られたデータを基に、引き続き4礼拝堂に関する考究を深め、いずれその成果を取りまとめて公にしたいと考えている。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

松田和之、コクトーの磔刑図 ノートルダム・ド・フランス教会聖母礼拝堂の三面壁画に関する一考察、*GALLIA* 第53号、査読有、大阪大学フランス語フランス文学会、2014、pp.51-60

## 6．研究組織

### (1) 研究代表者

松田 和之 (MATSUDA, Kazuyuki)

福井大学・教育地域科学部・教授

研究者番号：50239026